

学内/学外サービスの双方に認証基盤を用意

連携認証基盤の整備と Shibboleth に対応した情報サービス提供の実現

金沢大学

本学では、学内情報サービスの拡充の過程で、サービスごとに ID とパスワードが配布され、利用者は複数の ID を管理する必要に迫られていた。この状況を解決するため、学術認証フェデレーションに参加して技術やノウハウを蓄積し、シングルサインオン化を実現した。

課題

本学では、学生教育用の学習管理システム(LMS)、履修登録、図書サービス、就職支援、SNSのほか、教職員が利用する学務情報システム(成績入力、シラバス管理)、教員情報データベース、給与明細、発注システムなど、数多くのオンラインシステムが提供されているが、これらのサービスは利用者の要望に応える形で部署・部局が独自に立ち上げたもので、ID やパスワードもサービスごとに発行されていた。そのため、学生の入学・卒業や教職員の異動のたびに発行・廃止作業が発生し、業務上の負担となっていた。また、利用者にとっても、この状況は複数の ID を使い分けねばならず、不都合を強いていた。そこで、これらの ID を統合するシングルサインオン(SSO)の導入を検討した。

解決策

平成20年6月、本学の情報施策全体を統括する情報戦略本部が設立され、同本部のもと、乱立していたIDの統合とSSO化を実現する認証機構の統合に着手した。当時、学術認証フェデレーション(学認)では複数の大学と共同で Shibboleth による SSO の実証実験が行われており、本学もその実証実験に参加していた。学認に参加した目的は、SSO に関するノウハウの蓄積や他大学との技術連携だけではない。学内向けサービスの SSO 化に備え、サービスプロバイダ(SP)提供のノウハウの蓄積も視野に入れてのことであった。そして平成21年4月、学認が提唱する Shibboleth による認証機構や本学が学認に提供する SP 立上げ実績などを評価し、学認との連携を軸とした学内情報サービスの SSO 化が決定された。そして平成22年3月、学生や教職員などの利用者ごとに、あるいは総務部や学生部、各部局の事務部など部署・部局ごとに発行されていた ID とパスワードを統合し、新たにアカンサポータルを整備して SSO の本格運用を開始した。

実は金沢大学では SSO の認証基盤を2つ用意している。それは、学認などが提供する学外サービスを利用する時に使うネットワーク ID

をベースにしたものと、シラバスや業務システムなどの学内向けサービスを利用する時に使う金沢大学 ID をベースにしたものである。2つに分けた理由は、金沢大学 ID が学生の成績や教職員の給与明細などの重要な個人情報を管理する ID であり、なおかつ OB や OG が成績照会や同窓会向け情報サービスなどに使う生涯 ID でもあり、この ID を学認による大学在籍者を対象とした学外向けサービス用の ID と共用する場合のリスクを考慮した結果であった。将来的にはこの2つの ID の融合も検討している。

結果

現在、学内向けとして約20のサービスが稼働しており、ピーク時で1日1万1千件、平均で1日5千件(学生数は約1万人)程度の利用があるが、問題なく稼働している。特に ID 統合前の課題でもあった、学生でありながらも教員サポートスタッフ(TA/RA)を勤めていたり、教員でありながら附属病院医師、といった複数の立場を持つ利用者への対応も自動処理できるようになり、個別対応から解放されるなど業務の簡略化にも貢献できている。しかも電子ジャーナルサービスの利用についても学認に参加したことで学外から利用できるようになり、利用者の利便性も向上している。

また、認証基盤の根幹を情報戦略本部が掌握することで、新たなサービスを構築する場合も、各部署・部局は認証部分にタッチする必要がなくなり、サービスそのものの開発に専念できるというメリットが生まれている。

(金沢大学 総合メディア基盤センター 笠原 禎也)

